

相模の「うゐごと」

——初事歌群成立小考——

久保木 寿子

先に和泉式部の詠歌環境を初期定数歌の脈流において捉えようと試みた際に、和泉百首と相模「走湯百首」¹との相関について言及したことがあった²。その時点では、相模の六十五首歌群を定位する用意がなかったが、その後、近藤みゆき氏³が、流布本相模集末尾近くに置かれたこの六十五首（歌番号五二八・五九二 以下「初事歌群」と記す）について、走湯百首との比較検討から両者の百首歌としての同質性を指摘し、さらに針切断簡との総合的検討から、「初事歌群及び針切は初期詠の雑然たる秀歌選でなく、題詠百首として短期間に連作的に詠出された作品の断簡」と位置づけ、「現存針切は初期題詠百首の原形の面影をとどめるもの、流布本初事歌群は後年、改訂・抜粋し入集したものと推測された。一方、新出資料を加えながら断簡の精査を計る久保木哲夫氏⁴も、慎重ながら初事歌群と針切の百首歌としての連続性を認めておられ、その定数（百首）歌としての性格規定はほぼ定説化されたと言えよう。

相模の初事歌群が和泉式部百首に共通する歌材（個別の歌題が明示

されている訳ではないことから、歌題ではなく八歌材⁵と捉えたい）を踏襲することは、走湯百首以上であると、近藤氏は指摘する。首肯されるものである。氏はまた、初事歌群と走湯百首との独自な緊密性を、両歌群の枠組みの共通性（例えば①夏の冒頭歌を定数歌に多い「更衣」ではなく「卯の花」とすること、②「扇」を秋題で用いること、③針切の八題⁶「思」「夢」が走湯百首に共通する独自なものであること）、あるいは用語の共通性（ことなり語数・特有語）、詠作姿勢の等質性（「日常詠でない」詠法）を挙げて、詳細に論証している。

この近藤氏の説を更に押し進める形で、柏木由夫氏⁷は、歌材のみならず情調の有り様においても両者が相似することを言い、更に初事歌群には「東国的要素」が認められるとして、「六十五首は、『針切』を本として利用した箱根権現への奉納百首歌を前提とする習作と見なしでもよいのではないか」とまで踏み込んでいる。この場合、初事歌群の成立は、相模国下向の治安元年（二〇二二）以降、同四年（二〇二四）正月の走湯百首奉納以前の事となり、もはや「うゐごと（初事）」と記

す跋文にさえ背く成立事情を想定せざるを得ないことになる。

このように、初事歌群は、主として走湯百首との「類似性」に注目する方向で、定数歌としての位置づけが計られてきた。稿者も、初事歌群を初期定数歌の流れの中に位置づけ、走湯百首との類似を見ることに異存はない。ただこれが走湯百首と全く同質であるかといえ、多少の躊躇を覚えざるを得ない。歌群の枠組みが同一歌材により類同的に設定されたとしても、全く別の詠法により別の主題を展開しうるからである。

そもそも形態について言えば、春夏秋冬から成る初事歌群四季歌は重之や和泉百首に近く、一方、走湯百首は四季を各三月三句に分ける形態を始め、個別の歌も、例えば、中春「苗代水」・初夏「田植」・季秋「晚稲」と季を通じて農事を綴ったり、また「ふたかたに我が氏神を祈るかなこのてがしはのひらきたたきて」(早夏二四一)のように神祇意識が絡むなど、好忠毎月集(三百六十首歌)に倣う傾向が強い。

また、各々の序跋の記述に素直に従うならば、成立時期はさておいても、一方は「まことにいはけなかりしうゑごと」と認識されるものであり、他方は「えまうしつくすまじうおほえ」「心のうちに思ふこと」の吐露だという。前者のコメントは、和歌の技量の幼稚さについてであり、歌群の主題に触れない。これに対し、後者は、主題が夫大江公資との不仲に発した愁訴祈願であることを述べ、「百ながらみな古めかし」と相対化はするが和歌の技量の未熟さを言う訳ではない。即ちこの両歌群は、初期定数歌の枠組みに依り、それ故歌材など相当の共通

性を持ちながらも、主題に限らずかなりの差異が予想されるのである。あくまで初事歌群が走湯百首の歌材構成に決定的な影響を与えたのであつて、その逆に走湯百首を「前提」に初事歌群が習作された訳ではないと思われる。

今、便宜柏木氏の提起された問題点に沿う形で、初事歌群の性格を明らかにしたい。それは、ひいては残存する歌論の少ない当代の和歌観、就中、この歌群を自ら「うゑごと」として相対化した、相模の和歌観を考える端緒ともなろう。

一、枠組みの共通性と差異

共通する歌材の一つについては、先行研究に依り繰り返さないが、初事歌群・走湯百首は、先行する初期定数歌が作りあげた共通の歌材を枠組みとしている。従つてその部分に注目するならば、当然類似の傾向が浮かび上がる。例えば、夏の「蚊遣り火」に託される「燠る思ひ」などは、歌材から招来される共通の心情であつて、両歌群の特質がこれにより析出される訳ではない。「類似」に潜む「小異」を見る必要があると思われる。

両歌群(以下走湯百首はA百首を扱う)の冒頭数首を見てみよう。
初事歌群「春」

① つれづれと長き春の日見つくせどあかぬは花のにはひなりけり

(初事 五二八)

② 山里にかかるすまひは鶯の声まづ聞くぞとりどころなる

- ③ 早蕨や萌え出でぬらむ春の野に焼け原あさる人しげく見ゆ
(同 五二九)

走湯百首「春」

(同 五三〇)

- i 春山にかすみ立ち出ていつしかと時のしるしやありけると見ん

(走湯A二二二)

- ii 春くれば谷隠れなる鶯も都に出でてなかもと思ふ (同 二三三)

- iii 思ふこと開くるかたを頼むには伊豆の御山の花をこそ見め

(同 二三四)

初事歌群の場合。①は、駘蕩たる春の日長、飽くことのない花の美を詠う。②は、鶯の声に、いち早く訪れた山里の春を喜ぶもの。③は、早蕨採りに勤しむ人々を描く。

一方走湯百首は、iでは、霞のように神の靈験が立ち現れることを願ひ、iiは、自身を「谷隠れなる鶯」に喩える。この隠喩は、後にも触れるが走湯百首に顕著な方法である。iiiは、直接に権現の在所伊豆山を詠み込む。また、「と見ん」「とぞ思ふ」のように直接に詠者の視座を示す傾向が強い。

このように、初事歌群は、到来した「春」そのものを捉えようと腐心し、走湯百首は、春の景物に寄せ時間軸に沿いながらも、権現への期待を主観的に押し出す姿勢が顕著である。両歌群のこのような傾向性の違いは、冒頭に限らず四季歌全体に渡る。

さて初事歌群が、定数歌に限らず多様に先行歌を摂取している様は、

『相模集全釈』や柏木氏の論に詳しいが、ここでは四季歌二首について、その摂取の様を具体的に見てみよう。

- ④ 沢水に蛙も鳴けば咲きぬらむ井手のわたりの山吹の花

(初事春五三四)

(針切1) さわ水にかはづもいたくすだくなりいまやさく覽めで

の山吹

- ⑤ このごろは小野のわたりに急ぐらむ冬待ち顔に見えし炭焼き

(初事冬五五八)

「井手」「小野」は、初期定数歌の四季の歌材として、頻繁に登場する。柏木氏はこの二首を、「(歌枕を詠み込んだ) 歌数の少なさも注意されるが、同時にどちらも推量を伴い、作者が都周辺に有るその地かはなれていることを示している」と、「作者」の位置を実体的に東国と捉える手だてにしている。

④の「井手の山吹」は、言うまでもなく万葉の古歌「蛙鳴く甘南備河に影見えて今か咲くらん山吹の花」(六帖三五九八) から、「蛙鳴く井手の山吹散りにけり花のさかりにあはましものを」(古今「春下」二二五)を経て、山吹から蛙を、或いはその逆を、井手から離れた所で推測する「型」として定着する。離れた所とは言え、それは季節の推移をほぼ同時に感じられる範囲のものであることは言うまでもない。

「亭子院歌合」で「沢水にかはづなくなり山吹のうつろふ影やそこに見ゆらん」(歌合二六・「拾遺」春七一)と番えられた二七・興風「あしひきの山吹の花さきにけり井手のかはづはいまやなくらむ」(新

古今』春下「散りにけり」の歌は、「ふるめかしとて負く」と記されている。直接には枕詞「あしひきの」についての評言であろうが、井手の山吹と蛙を推量関係で取り合わせる趣向には、その弱点をカヴァーする程の新鮮さはなかったようだ。それにもかかわらず、「井手」が初期定数歌の応和の対象に採り上げられたのは、ひとつには、水辺の景の描写あるいは生活詠を指向する素材としてであったようだ。男性百首には、「山吹」とは無縁の井手を詠む傾向が見られる。

沢田川井手なる蘆の葉わかれてかげさすなへに春ふけにけり

(順百首 春)

かはづなく井手の若薦刈り干すと束ねもあへず乱れてぞふる

(好忠集 一一八)

今日きけば井手のかはづもすだくなり苗代水をたれまかすらん

(重之集 一二八)

一方、女性の百首は、蛙を捨てて花へと集注する。また、推量の型を捨てる。

春ふかみところもよかず咲きにけり井手ならねども山ぶきの花

(重之女集 一七)

河辺なる所はさらにおほかるを井手にしもさく山吹の花

(和泉式部集 一八)

このような中で相模④歌は、山吹と蛙を推量で取り合わせる旧来の型に回帰する。

周知のことに紙幅を費やしたが、要は、春の深まりを同時に感じら

れる範囲で、都人が近郊の井手に思いを馳せるのが歌枕井手の本意であり、現在推量「らむ」と密着して詠まれるのが常套の型であるということである。「らむ」は、「東国」で詠んだ事実の証拠にはならない。ここではむしろ、蛙と山吹の取り合わせにまで回帰して旧来の型に沿おうとする、初事歌群の「初心」の態度をこそ確認しておきたい。

直に「作者」を登場させる論の進め方は、初期定数歌の場合にはここにも注意が必要かと思われる。これは、例えば前掲の和泉式部一八歌から、『和歌色葉』の記事に見られるような井手寺と橋氏の伝承に絡めて橋道貞との関係が云々され、実体的な伝記考証が行われるような場合についても言えることである。初期百首歌は、好んで「海辺」にも「山里」にも自在に作品内主体を設定してきたのであり、同一歌材による応和も、そのような認識の上に成り立っていたのではなかったか。

なお、走湯百首では、

声たてて沢のかはづやすだくらむやへ山ぶきの今さかりなる

(走湯A 三三五)

と、「かはづ—山吹」を推量で結ぶ旧来の趣向を、「井手」とは無縁に仕立てている。東国在地の歌として通る形である。もし「奉納百首のための習作」として、前掲(針切1)を初事歌④に詠み換えたのであれば、その時点で「井手」を剥ぎ取ることもできたであろう。

次に⑤は、「炭焼たちは、木を樵り集め炭を焼いては売る厳寒の時を待っていた。そしていよいよその時が来た」と詠う。「炭焼」も又初期

百首歌に採り上げられた歌材である。『好忠集』三六四「み山木をあさなゆふなにこりつみてさむさをねがふ小野の炭やき」〔拾遺〕雑秋一四四「こりつめて」「さむさをこふる」に、主想を直接借りたものであろう。『好忠集全釈』が掲げる、『白氏文集』四「売炭翁」の「可憐身上衣正单、心憂炭賤願天寒」は、当歌にも通じる典拠であり、一首の興は、好忠歌乃至「売炭翁」の世界を、更に冬に近づいた状況において捉えたところにある（季を微妙にずらした応和は、初期百首の一つの傾向）。

走湯百首もまた「小野の炭焼き」を扱う。

あさけしていづる妹を待つほどはなげきこりつむ小野の炭焼き

（走湯A二七四）

「あさけ」「妹」などの語により、取えて古朴な万葉風恋歌の体を形成するのは、この歌が、好忠以来の初期百首の枠組みに依拠した、明らかな仮構歌であることを示すのであろう。近藤氏が「日常詠でない」詠法として、両歌群の詠作姿勢の等質性を指摘するのも、走湯百首にもこのような歌があることによる。が、この歌の主題は「投げ木樵り積む」即ち「嘆き凝り積む」にあり、「小野の炭焼き」は自身の投影である。走湯B百首は、

おほはらや炭やききたる妹をしてをの山なるなげきこらせじ

（走湯B三七三）

と、その真意を受け止め「嘆き凝らせじ」と慰撫する。

やくとのみなげきをこりて炭がまにけぶりたえせぬおほはらの里

（走湯C四七八）

このC百首を含め、走湯百首の「小野の炭焼き」は、自身の仮託であり、主題はあくまで不仲に苦しむ我が身の訴嘆にある。「売炭翁」で完結する体のものではない。先の「谷隠れなるうぐひす」でも見たように、隠喩は走湯百首に顕著で、これは固定的な歌材の枠組みを現実に対応するべく処理する一つの方法であったように思われる。

「作者」の問題に関わる、もう一例を見よう。四季歌最後の「歳暮」に当たる歌。

⑥ かずふればとしのをはりにけりわが身のはてぞいとどかな

しき

（初事五六二）

「歳暮」に人生の暮れを重ねるこの歌を、相模若年事の詠歌に相応しからずとする必要はない。初期定数歌で四季の掉尾に置かれるのは、しばしばこの手の歌である。

魂まつる年のをはりにけり今日にはまたやあはんとすらん

（好忠毎月集二六八）

かぞふれば年の残りもなかりけりおいぬるばかり悲しきはなし

（和泉式部集七九）

これらを詠作時の「作者」に直に結びつけるならば、定数歌の多くは老人の詠になるか、老いなければ定数歌は詠めないことになりかねない。相模歌も和泉式部百首の影響下に成った一首であることは、指摘されるとおりなのである。繰り返すが、初期定数歌の仮構の枠組みを考慮する必要がある。なお、走湯百首では、

おもふこと月日にそへてかぞふれば年のはてまでなりにけるかな

(走湯A二八〇)

このように日月年と累積した物思いを「歳暮」の枠組みで詠むものの、「身の果て」「老い」を重ねてはいない。夫の心呼び返すべく祈る主題からしてその必要がないからである。

見てきたように、初事歌群四季歌は、先行歌・典拠に依拠しつつ、ある既成の美的な歌境を懸命になぞろうとする。柏木氏が、網羅的に先行歌を検証されたとおりなのである。他方、走湯百首は、当然ながら体験的主题の追求である分、先行歌の美的な縛りが弱く、実情的である。

興味深いのは、この「うゐごと」が、⑤⑥のような初期定数歌的世界の追尋にのみあった訳ではなく、④のような旧来の古今的世界への指向を併存させていたことである。森本元子氏が「古典主義的な発想と対照的に、口語風の語句や発想の歌がある」と言われたのは、この異なる二系脈の先行歌摂取として理解される。相模の詠歌の「新しみ」は、この両者の止揚に向けて追求されていった可能性が予測されよう。

二、初事歌群の〈東国的要素〉を巡る問題

初事歌群「雑」の部は、恨み・嘆きなど様々な恋の思いを主題とする。その三十首中には、九首と際だって多くの地名が詠み込まれている。

- ① はやくより下のうらみは深けれど上ぞつれなき淀川の水

(初事雑五七〇)

- ② 明石浜いくら(よう)かさねにあらねどもうらみぞつくす人の心を

(同 五七二)

- ③ ひまなくぞなには(難波)のことも嘆かるこや(島)津の国の葦のやへぶき

(同 五七三)

- ④ 世の中をうち嘆きつつあふみ(近江)なるやす(野洲)きこととはねをのみぞなく

(同 五七四)

- ⑤ 菅原やふしみ(伏見)おきみがことぐさにうち嘆かるることやなにごと

(同 五七六)

- ⑥ とことば(島羽)に絶えぬ嘆きは山城のくせ(久世)になりぬる心ちこそすれ

(同 五七七)

- ⑦ くみしより心づくし(筑紫)に嘆くかな君ゆゑものを思ひそめかは(染川)

(同 五九〇)

- ⑧ いつとなく恋するが(駿河)なる宇土浜のうとくも人のなりまさるかな

(同 五八四)

- ⑨ あづまちのあさまのやま(浅間山)にあらねども思ひにもゆる胸ぞわびしき

(同 五九二)

その範囲は、筑紫から東国(五八四・五九二)までと広い。地名を掛詞として繰りあるいは序的に重畳させて、恨みや嘆き・恋の言葉につなぐ、語戲的な傾向が強い。

このような地名導入の契機を初期百首歌の系列に探ると、際だって歌枕地名に関心を寄せている重之百首⁽¹⁰⁾に行き当たる。

山城の淀のこぐさをかりにきて袖ぬれぬとはうらみざらん

(重之集二四五)

山城の鳥羽のわたりをうちすぎていなばの風におもひこそやれ

(同 二八〇)

葦の葉に隠れてすみしが宿のこや(昆)もあらはに冬はぞきにける

(同 二八七)

信濃なるあさまの山(浅間山)のあやしきは雪とぞきゆる火やはもえ

(同 二九二)

やむ

近江なる野洲の入り江にさす網の水を魚とけさぞ見えける

(同 二九五)

こひしさをなくさみがてら菅原やふしみ(伏見)にきてもねられざり

(同 三〇二)

けり

おもひやるわが衣手は難波めのあしのうらばのかわくよぞなき

(同 三〇二)

淀の津とみまき刈りにゆく人も暮にはただにかへるものかは

(同 三〇六)

相模の九首の内、明石と染川・宇土浜を除く六首が、右の重之百首の地名と重なる。頻繁に見られる、地名を掛詞として物名的に組み込んでいく詠法は、これも重之二八七「こや」・三〇一「ふしみ」などに見られるもの。初事①について言えば、重之二四五にも「淀のうらみ」が含まれている。また、初事⑨「あづまぢのあさまのやまにあらねども」のア音の繰り返しからは、重之二九二「あさまの山のあやしきは」に共通する音韻への関心を窺うことができる。枠組みとしての重之百

首の重要性を思うのである。

因みに、重之百首と重ならない三つの地名も、「おもひそめかは」「うどはまのうとく」のように、物名的であったり、音韻による語戲的な要素が強い。柏木氏も指摘するように次のような、六帖・後撰集歌などに倣ったものであろう。

思ひくれ嘆きあかしの浜によるみるめ少くなりぬべらなり

(六帖三「はま」一九一八)

年ふれば駿河なるてふ宇土浜のうとくのみなどなりまさるらん

(六帖二「く」一二六一)

筑紫なる思ひそめ河わたりなば水やまさらんよとむ時なく

〔後撰〕恋六・一〇四六

(返し) 渡りてはあだになるてふ染河の心づくしになりもこそすれ

(同 一〇四七)

歌枕の本意を、先行歌に倣って辿るこのような歌もまた、初事の習作であつたろうか。「うゐごと」とは、このような先行和歌に倣って詠歌技法を学ぶような、そのような段階のものの由ではなからうか。

重之百首は、この他にも多くの東国の地名歌枕を含んでいる(二九三ふ

じのやま・二九六しなのなるいな・かひがね 三〇五まつしまのいしま・三〇八つくばやま・三〇九な

とりがは・三二〇まがきのしま 三二五衣がは・三二六さかた・三二八まつ山・三二九たけくまのま

つ。にもかかわらず、初事歌群は、東国の地名は二首(五八四・五九一)に限り、いわばバランス良く地名を組み入れている。即ちこの東国の二首は、百首構成の枠組み内のものであり、ことさらに実体験に

引きつけて、「都」対「東国」の対応構造を読みとる必然性はないと思われる。

一方、走湯百首Aの明記された地名は次の通りである。

i 真孤草淀¹のわたりにかりにきて野がひの駒をなつてしかな

(走湯A二四四)

ii 命だになかす(長洲)にあらば津の国のなには(難波)のことも嬉し
からまし

(同 二八八)

iii 思ふことひらくる方をたのむには伊豆のみ山の花をこそ見め

(同 一二四)

iv 呉竹のよにながらふるものならば伊豆の方をぞふしおがむべき

(同 二八六)

v 東路にきてはくやしと思へども伊豆にむかふぞうれしかりける

(同 三二六)

vi けぶりたつ富士の高嶺に降る雪は思ひのほかに消えずぞありける

(同 二七六)

vii 明暮れの心にかけて箱根山ふたとせみとせいでぞたちぬる

(同 三二五)

viii いつとなく浪のかかれば末の松変はらぬ色をえこそたのまね

(同 二九七)

ix なぞもかく思ひたえせぬ身なるらむ室の八島はここならねども

(同 三〇三)

最初に掲げた i 「淀」、ii 「難波」以外には、初事歌群と重なる地名は

ない。東国の地名は、伊豆山権現を意識した個別具体的なものであり、重之百首の東国の地名とも殆ど重ならない。また ii 以外には、物名的詠み方・音韻の連鎖による語戲的展開は見られず、この技法を繰り返しながら初事歌群とは対照的である。i・iiの東国外の地名二つは、先の地名「小野」と同様、百首の枠組みを示すものである。また、その i の「野がひの駒」が、荒れて離れていく夫を寓するように、他も体験的に詠まれており、個別の人事の喩を含まない初事歌群の詠法とは明らかに異質である。

以上のように初事歌群は、取捨された地名の総体においても技法において、いわば重之百首風であり、虚構の枠組みとしていくつかの東国の歌枕を用いてはいても、走湯百首とは異質である。地名の考察からは「奉納百首歌を前提とする習作」の根拠になるような東国的要素は、浮かんでこない。

三、都と山(ざと)

地名歌枕とは異なるが、散見する都と山に関わる語に注目してみた。

初事歌群の「都」「山」関連語を含む歌を列挙してみよう。

① 山ざとにかかるすまひはうぐひすのこゑまづきくぞとり所なる

(初事春五二九)

② 花ならぬなぐさめぞなき山ざとのさくらはしばしちらずもあら
なむ

(同 五三二)

③ かすみだに山ぢにしばしたちとまれすぎにし春のかたみともみむ

(同 五三五)

(針切2) かすみだにみやこにしばしたちとまれすぎゆくはるのかたみとみせん

④ とひわたる人もやあると人しれずまつにおとせぬ宮こどりか

(初事雑五六四)

(針切24) ずか山おぼつかなくてほどふれどおとづれもせぬ
人やなにひと

⑤ 思ひきやしらぬ山べをながめつつ宮こひしきねをなかむとは

(同 五七八)

⑥ 身のうきをおもはぬ山にゆきしよりなみだをえこそとどめざり
けれ

(同 五八九)

初事歌群の成立・相模伝の問題は、しばしばこれらの用語を含む歌を根拠になされてきた。例えば森本氏が当歌群を、長保三年(一〇〇二)から寛弘二年(一〇〇五)ごろ、義父頼光の初度美濃守時代の詠と想定する根拠にも、④五六四・⑤五七八が引かれ、『相模集全釈』も、⑤「宮こひしきねをなかむとは」「思ひきや」に体験性を認め、①五二九・②五三二(山里詠)と合わせて「少女時代都を離れ：但馬に住んだ可能性」を指摘し、『権記』寛弘八年八月の頼光「但馬前司」の記事からして、寛弘七年(一〇一〇)までのこととする。一方、柏木氏が、針切を「京の都での作」、初事の歌は針切を基に「東国での百首成立直前に改訂された」かとする根拠にも、③五三五に対応する針切

2・④⑤の「都」に関わる詠が挙げられている。しかし①⑥を見る限り、美濃とも但馬・相模国とも特定する根拠はない。

①②について言えば、そもそも「山里」は、通常都人の雅の圏外にある侘びしい場所を指す。が、拾遺集時代に至り、花・霞・鶯・紅葉などによって華やぐ美的空間・小世界として、取りわけ公任において顕著に意識化されたと言われる。この歌語の形成の経緯については、小町谷照彦氏に詳細な指摘がある。寂寥・憂愁・孤絶の表象であった古今集段階での「山里」から歩を進めて、ちやうど氏の挙げる「山里にすむかひあるは梅の花みつつ鶯聞くにぞありける」(貫之集一四二)に相応なのが①の歌で、山里が鶯や桜により、条件付きながら肯定的に許容され始めた「拾遺集段階」に相当するようである。後の「山里の春の夕暮れ来てみれば入相の鐘に花ぞ散りける」(能因)に結実したような閑寂な美意識に迄は未だ至らない。

洛東白河に山莊を構えた公任に限らず、初期定数歌歌人たちが早く河原院に集い廢園の美を詠い、東山辺を逍遙しつつ「山里」への指向を深めていたことも注意される。そして、「都」あるいは「雅」の意識が明確化するに連れ、「山里」が新たに意味づけられていった経過からすれば、「山里」は、純然たる地方であるよりも、都の郊外即ち雅の境界線上に位置する所で、最もよく機能する歌語であったと思われる。

③は、対応する針切2に「都」が詠まれている。両歌の差異は「山ぢーみやこ」「すぎにしーすぎゆく」「みむーせん」の部分であるが、「惜春」の主題は同じである。思うに、針切2本文が示す「都に霞が留

まっている状態」では、「山たかみ都の春をみわたせばただひとむらの霞なりけり」(『後拾遺』春三八)のように、都の春爛漫を想起させこそすれ、「春のかたみ」の表象たり得ないのではないか。春が都から去っていく山路に立ち留まってこそ、その霞を都から形見と「見る」のである。「山ち」は、都の外縁に想起される山路であつてよく、相模の国の山路である必要はない。③へと改編されたとすれば、針切2の歌自体の曖昧さの故であつて、「作者」の在所の移動とは関係がないと思われる。

因みに③の歌は、『新勅撰』夏に巻頭歌として置かれている。同集春の巻軸歌は、俊成の三月尽の歌「ゆく春の霞の袖をひきとめてしほるばかりやうらみかけまし」である。針切2の三月尽の心を徹底させるべく推敲した結果が、「過ぎにし」の語により「夏」に所収されるような「行き過ぎ」を招いたのであろうかとも憶測される。

以上、三首の山(里)詠が、四季歌の中では「春」にのみ偏在するものも、これらが体験とは無縁な観念の所産であることを傍証するものであろう。

ここでも走湯百首Aと比較しておく。圧倒的に多いのが「御山」として採り上げられる伊豆山(五例)で、これは奉納の趣旨からしても当然の事ではある。ほかには、「山」・春夏の「山辺」(二例)が詠われるのみで、「山里」の用例はない。

さて、「作者」の位置を都から離れた所に措定する最大の論拠とされるのが、④⑤の「都鳥」「都」である。結論から言えば、これらの歌も

又、先行歌に学ぶ姿勢が顕著で、安易に体験に帰す訳にはいかないように思われる。順次見ていこう。

④は確かに、東国に逼塞する相模が、都からの音信を心密かに待つと解せそうな歌である。一首の趣向は、言うまでもなく『伊勢物語』九段「名にし負はばいざこととはむ都鳥……」に依る。昔男の詠に対して、当歌はこれ待つ女の歌に切り替える。和泉式部の和泉国下向時の歌、「事とはばありのまにまに宮こ鳥都の事をわれにきかせよ」(和泉式部集六七一・『後拾遺』羈旅五〇九)などが、伊勢物語を踏む女歌の前例として享受されていたであろう。縁語掛詞の語戯による機知的な一首である。

相模国下向後に都を偲んで、右の針切24を④に「差し替え」たとすれば、なぜ「鈴鹿山」から「都(鳥)」へなのかが問題となろう。そこに「作者」の在所の移動を介在させる必要があるのかどうか(そもそも相模が鈴鹿山にいた形跡はないのだが)。因みに、音信の無いことを嘆く主題に変更はない。

まず「鈴鹿山」だが、周知の斎宮女御の詠、

円融院御時、斎宮くたり侍りけるに、母の前斎宮もろともこええ侍りて世にふれば又もこえけり鈴鹿山昔の今になるにやあるらん

(『拾遺』雑上四九五・斎宮女御集二六二)のように、伊勢の斎宮関連で詠まれる事がある。都鳥の歌に「差し替え」たのは、或いは、この「伊勢」の地から『伊勢物語』への連想に

よるのではなからうか。斎宮女御集には、「伊勢より」という詞書で次の歌がある。

人をなほうらみつるかな都鳥ありやとだにも問ふをきかねば

(斎宮女御集七〇)

『伊勢物語』が意識されていることは、言うまでもない。

このような周知の歌枕と、歌枕が内包する觀念を基にすれば、鈴鹿山から伊勢・伊勢物語を想起することは、詠者の在所にかかわらず可能だったのではなからうか。そして単なる待つ歌というのではなく、「うらみ」の主題をより明確にしようとした時に、この斎宮女御集七〇の歌は、格好の先行歌として機能したのではなからうか。

⑤は、前後の歌からして「嘆き」の歌。確かに実情的で、もつとも説明の付きにくい歌である。が、一首は極めて構成的である。則ち、周知の小野篁詠、

思ひきやひなの別れにおとろへてあまの縄たきいさりせむとは

(古今集九六一)

この「おもひきや」とは」の型に、

あけくれはまがきの島をながめつつ宮こ恋しきねをのみぞなく

(信明集二三九)

の下句を組み入れて、海浜の景を山里に転じた体のもので、「しらぬやまべ」にも、次のような用例がある。

うぐひすのこゑをしるべになきくらししらぬ山べにやどりをやせむ

(忠見集一〇七)

この⑤五七八歌に続く五七九歌は、

かづきするあまのたく縄うちにはへても嘆かしくおもほゆるかな

(初事五七九)

とあって、同じ篁詠から連想された可能性も考えられる。

ここでも、走湯百首AC中の「都」表現と比べておく。

はるくれは谷隠れなるうぐひすも宮こにいでてなかつと思ふ

(A百首二三三)

みやこなるおやをこひしとおもふにはいきてのみぞみまほしけれ

(同 二八九)

むもれぎのなかには春もしられねばはなのみやこへいそがるるかな

(C百首四二七)

宮こにてさいはひくればあさひ山にしぎまにとくのほりにしかな

(同 四八六)

たひらかにおくられたらば宮こよりかみの心をおもひおこせむ

(同 四九二)

ここに見られる「都」はすべて、起点や帰着点を示す助詞・助動詞を伴う。即ち「現実の都」が想定されているのである。また一首の構築の仕方が、「谷隠れなるうぐひす」「むもれぎ」の隠喩を含むものの、概して率直な実情歌であることも明瞭であろう。

残る⑥(五八九)の「おもはぬ山」は、「時しもあれ花のさかりにつられればおもはぬ山に入りやしなまし」(『後撰』春中七〇)に依る。早く『蜻蛉日記』地の文にも引かれる、觀念化された歌語である。

四、詠作の視座

最後に詠作の視座について、ごく単純に「とおもふ」という用語を手がかりに概括しておきたい。この用語は、初事歌群四季歌（三五首）には一例も見られず、雑歌（三十首）にのみ五例（約17%）が検索される。対する走湯百首（ACを合算）では、四季歌（一一九首）に八例（約7%）、雑歌（七九首）に六例（約8%）である。

即ち、初事歌群が、作品内主体の内在的視座から詠じる四季部と、一人称の視座をあらかじめ打ち出す雑部を詠み分けるのに対し、走湯百首の視座は終始一定している。初事歌群で四季・雑の部の視座が極端にブレるのは、それぞれが意識的・構成的に構成された結果であろう。一方、走湯百首の場合は、「奉納」に向けて実情的に詠まれたところから、自ずと一定の数値が生じたものと思われる。

このように両歌群は、同じく定数歌の歌材や枠組みに依りながらも、詠作の視座・態度においても明らかな相違が見られるのである。

また主題に絡めて付言するなら、初事歌群の雑歌では恨みや嘆きは多く内向するのだが、走湯百首の場合は外（権現）に向けて率直に願望し訴える形が多い。針切が初事歌群と同様の内向性を示すことは、「夢」から次の例を挙げれば、一目瞭然であろう。

（針切20）うへみてもおほつかなきは人にたにかたりあはせぬゆめに

さりける

いかでとく夢の徴をみてしがな語りつたふる楽しびもせん

（走湯A三二〇）

以上、類似的側面が強調される初事歌群と走湯百首について、いくつかの観点から、少なくとも異なる異質性を指摘してきた。その結果からは、初事歌群（及び針切）は、その歌材が共通の枠組みとして走湯百首の構成に多大な影響を与えてはいるものの、「奉納」百首歌を前提とする「習作」とは位置づけ得ず、従って、その成立を相模下向後の時期に想定する必然性もないと思われる。

五、相模の「うるごと」

「まことにいはけなかりしうるごと」と記す初事歌群の跋文は、流布本相模集の編纂時に付されたかとされる。流布本相模集序文及び末尾の長歌からして、異本相模集が世に流布した後、長元四年（一〇三二）頃のことになる。既にこの時点で、見てきたような初事歌群の詠作態度、即ち、陳腐とも見なされるような発想・技法にまで回帰し、ひたすら先行歌の言い回しをなぞり典拠に依ろうとする態度は、「うるごと」として明確に相対化されていた訳である。

確かに、例えば『古来風体抄』に採録された相模の次のような歌と比べて見れば、和歌の熟成度の差異は明らかである（歌番号本文は同抄による）。④以外は『定家八代抄』にも収載

① 見渡せば浪のしがらみかけてけり卯花咲ける玉河の里

（四一七 後拾遺集所収）

② 逢ふ事の無きよりかねてつらければさぞあらましに濡るる袖かな

（四五四 同）

③ うらみわびはさぬ袖だにあるものを恋に朽ちなん名こそ惜しけれ

(四七一 同)

④ 夕暮は待たれしものを今はただ行くらんかたを思ひこそやれ

(五五六 詞花集所収)

②は流布本四三の歌。入集した『後拾遺』恋一・六四〇の詞書によれば、定頼がらみの歌で、公資と相模の蜜月期の歌であることから、相模国下向以前に詠まれたものと推定される。現実の人間関係が複雑になるに連れ、詠み込まれる情調・心の深さが増し、表現に独自性が加わるのは当然でもあろう。初事歌群のような生硬な詠法が、このような複雑な現実に対応しうる手法であったとは思われない。④は異本相模集巻頭歌。①③の二首は、それぞれ永承五年（一〇五〇）四月正子内親王総合、永承六年（一〇五一）内裏歌合の歌である。どちらも、心と詞に過不足のない手練れの歌と言つて良い。偏狭ではない古典主義的態度ゆえに獲得し得たへ新奇な典雅さであり、初学の結実したひとつの姿と見ておきたい。

「いはけなかりしうゐごと」と記す跋文は、単なる謙辞と言うには特殊にすぎる。そして、以上の考察の結果からは、初事歌群は、初学の実体を伝えていると考えて差しつかえないのではなからうか。歌群自体と跋文とに齟齬はないのである。

*歌番号・本文は、新編『国歌大観』による。但し、私に漢字に改めたところがある。

注

- (1) 相模奉納百首、権現の返し百首、再度の相模百首の三群から成るが、本稿では、主として初度の奉納百首を対象とする。犬養廉氏「相模に関する考察―いわゆる走り湯首をめぐって―」（『嵯峨王朝文学』昭和53・12）に倣い、それぞれをA・B・C百首と呼ぶ場合がある。
- (2) 拙稿「和泉式部の詠歌環境―その始発期―」（『国文学研究』71 昭和55・6）
- (3) 満田（近藤）みゆき「もう一つの百首歌―『流布本相模集』初事歌群を中心に―」（『平安文学研究』六八輯 昭和57・12）
- (4) 久保木哲夫「針切相模集といわゆる『初事歌群』について―私家集と歌群との関係―」（『王朝文学資料と研究』平成4・8）。針切番が本文は、本書による。
- (5) 柏木山夫「相模について―『相模集』六十五首歌群の意義―」（『平安時代後期和歌論』平成12・10）
- (6) 拙稿「初期百首の神祇意識―好景首を起点に―」（白梅学園短期大学『紀要』第30号 平成6・3）
- (7) 注3論文、『相模集全釈』解題（吉田ミズズ担当）平成3・12など
- (8) 神作光一・島田良二『曾祢好忠集全釈』昭和50・11
- (9) 森本元子「相模―作品を通してみる人と生―」（『王朝の和歌』平成5・12）
- (10) 小町谷照彦「地名表現の開拓―源重之―」（『古今和歌集と歌』とは表現』平成6・10）
- (11) 注9論文
- (12) 小町谷照彦「美的空間としての山里―藤原公任―」（『古今和歌集と歌』とは表現』平成6・10）
- (13) 拙稿「初期百首と私家集―好忠百首を中心に―」（『王朝私家集の成立と展開』平成4・1）

くばき としこ（日本文学）